（吾妻鏡）

文治六年正月八日、奥州叛逆の事に依って軍兵を分ち遣わさる。海道の大将軍は千葉介常胤、山道は比企籐四郎能員なり。而して東海道岩崎の輩は、常胤（千葉）を相待たずといえども、先登（せんとう）に進むべくの由、申請するの間神妙の旨仰せ下さる。よって彼の輩者、奥州の住人たりといえども、弐（二心）存ぜざるか。各隔心（きゃくしん）無く之を相具して、合戦を遂ぐ可くの趣、今日飛脚に付して、奥州の守護御家人等の許（もと）に仰一遣さると云々。このほか近国の御家人結城七郎朝光以下、奥州に所領あるの輩においては、一族等に同道すべきの旨を存ぜず、面々にいそぎ下向すべきの由、仰せ遣はさると云々。

同年２月、大河兼任は一族郎党：七千余騎を集め、山北（せんぼく）に決起します。河北・秋田城を落として 大関山（または有耶無耶の関、山形県と宮城県の県境？）を通過して 多賀城を狙うと見せかけます。 意気揚々と秋田大方（八郎潟？）に集結しております。ところが、その志加の渡（志賀渡＝しがわたし？）を越えるときに湖の氷が割れてあわれ七千騎は湖のなかへ飲み込まれてしまいました。このため、このうちの約五千騎が溺死しております。（このシガには氷という意味もあるますから、氷上を渡ったときに、という風にとられることもあるようです。）この痛手を被った大河兼任軍ですが、勢力を回復して、男鹿の大社山（または大杜山＝秋田市大森山か？）および毛々左田（秋田市）で 討伐軍とのあいだに戦闘がおこります。 由利維平・橘公業等の討伐軍は敗れ、由利維平はこのとき戦死しております。（大河兼任と由利維平とは小鹿島で戦って由利維平が戦死したというのもあります。（本朝通鑑））

大河兼任軍はこのあと南下しないで、津軽に北上していきます。そして、勢いのままにそこに赴任したばかりの御家人の 宇佐見実政（平泉攻略北陸道軍を率いていた）を討ち取ってしまいます。

（吾妻鏡）

文治六年正月十八日、伊豆山に御一座（おんおわします＝頼朝のこと） に葛西三郎清重、去る六日の飛脚、奥州自り参す、 申して云う、兼任と御家人と箭（や＝矢）合わせ既に訖（おわ）ぬ。御方（みかた＝味方）軍士の中、子鹿島橘次公成（おがしまきちじきんしげ ＝討たれたのは間違いで、逃げて鎌倉に行った）・ 宇佐見平次実政・大見平次家秀・石岡三郎友景等討ち取られし也。

大河兼任は津軽の関東勢を駆逐したため、奥州総奉行葛西清香は 鎌倉に注進し助勢を依頼しております。源頼朝は追討軍を編成しました。

海道大将軍には千葉常胤を、山道大将軍には比企能員を任命しております。

さらに足利義兼を追討使に任命しております。そして、奥州の御家人（結城朝光や藤原能直等）にも出陣を命じております。関東からも続々と征討軍が北上していきました。

（吾妻鏡）

文治六年正月一三日

今日奥州の凶徒を鎮めんがために行か向かうべきの由、上野・信濃の国の御家人に触れ仰せられをわんぬ。次に上総介義兼（足利）、追討使として発向す。

一方、津軽を制覇した大河兼任の軍は平泉の残党を集めて、一万の軍勢に膨れ上がっております。

大河兼任は南下を始め、陸中（岩手）にはいって、平泉を 占拠して磐井から栗原郡（宮城県）に布陣します。 ここの一迫（いちのはざま）で、足利義兼等の追討軍と衝突しました。

（吾妻鏡）

文治六年二月一二日、

發遣の軍士ならびに在国の御家人等、 兼任を征せんがために、この間奥州に群集す。 おのおの昨日平泉を馳せ過ぐ。

泉田に於いて凶徒の在所を尋ね問ふのところ、兼任一万騎を率し、すでに平泉を出づるの由と云々。